



球体は野生のかたち星凍つる	辻 美奈子
うそほんとポインセチアの真つ赤なり	田所 節子
三寒四温てふ人の世に似たるもの	千田 百里
つくばならひぐいと帆舟の向き変はる	吉田 政江
人いつか一壺となりて春の星	荒井千佐代
漂泊の寒の大気を換気とす	甲州 千草
うろちへと戻るメールや松過ぎて	町山 公孝
詩ごころはリズムとなりて落葉道	宮内とし子
湯豆腐や中途半端に善人で	栗原 公子
色足袋に家事は莫大無限なり	小野 寿子
冬の蝶ノクターンまたノクターン	矢崎すみ子
綿虫の空の放心してゐたる	七種 年男
晴れて白曇りて真白冬かもめ	井原 美鳥
雪霏々とじやわらじやわらの津軽三味	くどうひろこ
家中が着ぶくれてをり家族なり	菊川 俊朗
凍星を追ふ旅であり山頭火	平松うさぎ
十二月来たり駅前ポスト赤	佐藤 克江
木霊して木曾は木の国斧始め	大久保志遼
吹雪く夜は挽歌のやうに海の鳴る	小坂 尚子
柚子一顆多彩に使ひ切る愉楽	荒井千瑳子
風花の一片ほどの一会かな	森村 江風
日溜りの懐深く冬の蜂	本池美佐子
冬うらら三角定規に穴がある	小林 陽子
寒波来る海峡の空鳴りどほし	小倉 征子
冬干潟生命体は皆必死	牛島 晃江
果てぬ間のほむら紫牡丹焚	里村 梨邨
仏飯もさみどり色の七日粥	五十畑悦雄
天つ風磨く星々冴ゆるなり	澤田 英紀
おでん酒ふるさと遠き人ばかり	工藤 邦子
わらづとに孤高を持する寒牡丹	岩波 博庸

